☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ 輝く地域の星となれ ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

報道で見る氷上西高　２０２０

朝日新聞　令和２年７月１１日（土）

放課後カフェ 地域の憩いに

氷上西高まちづくり部の生徒ら再開

雨の中、多くの人が訪れ、コーヒーを味わった＝いずれも丹波市青垣町佐治

県立氷上西高校（丹波市青垣町佐治）のまちづくり部員が、高校生が憩える場所を自分たちで作ろうと、「放課後カフェ」を開いている。学校がある佐治地区にこうした場所はなかったといい、いつしか生徒だけでなく教職員や住民も訪れるように。新型コロナウイルスの感染拡大で2月を最後に中断していたが、10日に再開。もっといいカフェにと部員は意気込む。

カフェは昨年7月からほぼ毎月1回、放課後に開いてきた。地区の古民家を活用して設けられている関西大佐治スタジオなどが会場で、管理する佐治倶楽部が協力している。部員が店員になり、コーヒーやカフェラテ、手作りのサンドイッチやクッキーなどを100円で出す。

カフェを始めたのは昨年度の3年生。中心メンバーとして運営してきた広内たま美さん(19)は「（氷上西高に通う）氷上町の子に『青垣の子は遊ぶところが川と住民センターしかない』と言われ、それなら自分たちでつくろうと考えた」と、きっかけを話す。

「高校生がするからクオリティーが低いというのはいや」と、部員で話し合い、メニューなどを考えた。市内で開かれている子ども食堂「どんぐり食堂」とコラボしたことも。部員は黒板にメニューを書くなど手伝った。「子どもたちと遊んでくれ、子どもたちも喜んでいた。すごく助けてもらった」と、どんぐり食堂代表の足立美樹さんは部員の頑張りを評価する。

先輩の思いは後輩に引き継がれている。今年度の部員は26人。部長を務める3年生の安部将弥さん(17)は友人とカフェを訪れ、自分もやってみたいと部員になった。料理が得意で、2月のカフェではお菓子づくりも手がけた。

住民ら利用■「小中学生もどうぞ」

清水健矢さん（一番右）からコーヒーの入れ方を学ぶ氷上西高のまちづくり部員

新型コロナウイルスの影響を受けた休止に「これから新体制という時に休校になり、カフェをできなかったのはつらかった」と安部さん。それでも6月には丹波市でカフェを営む清水健矢さん(25)にお願いし、部員15人でコーヒーの入れ方の指導を受けた。豆の産地による味の違い、ペーパーフィルターの使い方やお湯の注ぎ方など、細かい点まで実地で学び、技術を上げようとしてきた。

約5カ月ぶりとなった10日のカフェ。コーヒーやココア、部員手作りのスコーンなどを販売。コーヒーは豆からひき、コーヒーの香りがあたりに漂った。初めて訪れたという3年生の橋本友幸さんは「雰囲気もいいし、コーヒーも豆からひいていて、かなりおいしい。時間があればまた来たい」。3人で訪れた市内の女性(57)は「高校生が入れたと思えないおいしさだった。初めて入ったけれど、高校生も親しみやすく、また来ようと思います」と話した。

安部さんは「ばたばたして反省点も多かったけど、みなさんゆっくりカフェを楽しんでくれた。やってよかった」。「子ども食堂とのコラボを経験し、地域の人にどんどん来てほしいと思っている。小中学校にも宣伝して、放課後に高校生が小中学生に勉強を教えてあげられるような場所になれば」と今後を見据える。

まちづくり部員はカフェのほか、ユーチューブでの情報発信、地元産品を生かした商品の開発販売なども目指している。顧問の神崎悠哉教諭は「カフェなど自分たちで考えてくれ、まかせています」と頼もしく生徒を見守っている。（前田智）